
天空の使者

Old Plain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空の使者

【Nコード】

N5692P

【作者名】

Old Plain

【あらすじ】

ある国に、こんな伝説があった。

『世界が魔の力によって空が赤紫に変わるとき、その空と同じ色の瞳を持つ者が現れ、魔を世界から排除する。』

これは、空と同じ色の瞳を持つ少年の、若干のんびりとした冒険の物語である。

さあ、異世界ノープランファンタジーストーリーの、伝説の始まりだ！！

プロローグ 黒い穴（前書き）

ども初めましてO i d P l a i nと申します。

なんか気づいたら読む側から書く側になってしまいました・・・

駄文ですが、よろしくお願いします。

プロローグ 黒い穴

やあ、初めまして読者様。いきなりだがちょっと話を聞いてくれな
いか？

実は今、なんかすごい勢いで空から落ちてるんだよ。

オレはいつもの様に学校から施設に帰っていたんだ。

ん？なんの施設かって？孤児院だよ。

なんか、物心がついた頃からすでに施設にいて、親がないんだ。

まあ、捨てられた理由はなんとなくわかるよ。オレはちょっと『異
端』だから。

4

『これ』のせいで今までずいぶんと酷い目に遭ってきた。

ガキなんて、誰かが皆とちよつと違う所があれば、ガキ共はその誰
かを怖がり、恐怖し、自分に近付けないようにする。

要は、イジメを受けてたんだよ。

上履きや教科書が無くなるのは当たり前だった。

ほぼ日常的に体育館裏に連れて行かれて、ボコられた。それも大人

数で。

それが小三から中三位まで続いた。

さすがに高校にもなればイジメなくなった。だけど、オレの存在は完璧に無視されていた。話しかけても無反応。消しゴムが遠くに転がっていても、誰も拾ってくれない。

まあ、そんなことは別に苦じゃなかった。施設に帰ったら幼馴染二人がいつも相談に乗ってくれた。あいつらだけはオレを人間扱いしてくれて、しかも友達でいてくれた。なのに何故かクラスが違う。なので学校で会えるのは昼食の時間だけだ。

話が逸れてしまったな。

そう、オレはいつもの様に帰路についていたんだ。

ただ、いつもと違ったのが幼馴染二人は部活で遅くなるから、一人だったってことくらいだ。

オレは一人寂しく歩いていたのだが・・・

「えっ!?!?うおっ!?!?」

なぜか、何も無いところで足がもつれ、体が前のめりになった。体勢修復不能。

それだけならまだ良かった。だけど、いきなり道に黒い穴が開いて

・

「ちよつ、ヤバツ!! . . . うわあああああ!! . . . !!」
穴に落ちた . . .

で、今の状態にあるわけだ。

どう考えたっておかしいでしょ? だって地中に落ちたんだよ? なん
で空から落ちてんだよ!? しかもなんか知らんがそらは赤紫色だし
!?

よく見たら下には綺麗な川とお花畑が広がってる。

ハッ!? そうか、ここは三途 リバーなのかつ!? ちよつと離れた
ところにでっかなお城があるのが気になるが . . . いやだ、まだ死
にたくない!! . . . !!

だけどそうしてるうちにも地面はどんどん近づいていき . . .

ボゴオツ!! . . . !! 「ゴファツ!! . . . !!?」

衝突した . . .

「 あれ? あんま痛くない 」

オレはのろのろと地面から這い出た。

地面には綺麗な人型の穴が開いていた。

つてかアニメかよ。普通開かないよね？

「とりあえず．．．ここはどこだ？」

パンパンツ、と、服についた汚れを落としながら、辺りを見回す。

だけど、360度見回しても花畑しか見えない。

そうだった！たしか近くに城があったはずだ。そこに行ってみよう！

一歩踏み出そうとしたそのとき、

「あなた．．．ここで何をしていますか？」

後ろから声がした。

「えっ？」

振り返るとそこには．．．

同年代くらいの美少女がいた。

だけど、その子はいろいろと地球人っぽくなかった。

どこの大陸に銀髪紅眼の美少女がいるよ？

金髪碧眼ならまだわかるよ。

しかもなんか自分より大きい杖みたいのも持ってるし・・・オレにそれを突きつけないでくれ！

しばらく眼を瞑って考えていると、

「答えてください。さもなければ火魔法で燃やしますよ?」

って言われた。

「は?魔法?いやいや怖くないし。実際あつたらみせてm」

ゴウ!

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・なんか熱気を感じたのですが・・・

ゆっくり眼を開ける。

そこには杖から炎を噴射してる美少女が・・・

「ス・・・スゲー!!!カッケー!!!」

「・・・・・・・・・・(パクパク)」

あれ?なんかあっちも眼を見開いて口をパクパクさせてんぞ?なぜ?

「あ．．．．．あなたはまさか．．．．．!」

なんですかね？

「その．．．眼の色はっ!?!?!?!?!?」

これがなんだってーの

「おとーーさまああああ!?!?!?!?!てっ、 『天空の使者』様が
あああああ!?!?!?!?!」

と叫びオレに土煙を盛大に浴びせながら、城の方に走っていった。

「げほっげほっ．．．クツ．．．なんなんだいきなり．．．ってか『
天空の使者』ってなに？」

このときオレはまだ知らなかった。

もうすでに、オレの『天空の使者』としての物語が、始まっている
ことに．．．．

プロローグ 黒い穴（後書き）

第一章 天空の使者（前書き）

いきなり更新が遅れてしまいました・・・

親に隠れながら更新するのなんてムリだろ・・・

あああああ！！！！自分のpcが欲しい！！！！！！

第一章 天空の使者

女の子が走り去ってすぐ、十数人の厳つい顔をした兵隊さんたちがオレの元にやってきた。

で、お城に連行された・・・

今オレがいる場所は玉座の間、っていうの？あの王様と王女様が座ってるところ。あそこだよ。

王様は、いかにも王様ですっ、という感じのどっしりとしたオーラを醸し出していて、だけど見た目は20代後半に見える。こちらは金髪碧眼。

王女様は、やさしそうなイメージ。髪は肩ぐらいまでで切りそろえていて、まあ綺麗な方なこと。こちらは銀髪紅眼。

あれっ、なんかさっきの女の子王女様の隣に立ってるよ。んー、容姿が似てるから娘なのかな？じゃあお姫様かよ！

ってか、どうしていオレはここに連れて来られたんだ？

まさか不法侵入！？あのお花畑に入っちゃいけなかったの！？待って、オレはただ穴から落ちて．．．って、説明してもわかんないか．

オレがしばらくウンウンうなっていると、王様が話しかけてきた。

「あー、貴殿は本当に『天空の使者』なのか？」

出た。『天空の使者』。なんですかそれ？

「えーと、．．．なんですかそれ？オレはただの一般ピーポー（People）ですよ。」

「ピーポー？まあ良い．．．娘よ、彼は本当に『天空の使者』なのか？」

「絶対にそうです！私は見ました！！彼の……」

彼の赤紫色の瞳を！！」

………どうして眼が赤紫色だと『天空の使者』なんだ？

何？オレの眼の色がなんで赤紫かって？カラコンじゃあないよ。生まれつきだ。

こいつのせいで今まで苦労したんだよなあ……因みにプロローグで言ってた『異端』ってのはこれのことね。

「すみません、質問をしてもよろしいでしょうか？」

「ん？なんだね？」

「まず、『天空の使者』ってなんすか？それと、どうして眼が赤紫だとそれになるんですか？」

「……………」

あれ？なんか呆然としてる……………

「き……………貴殿……………あの伝説を知らぬのか……………」

「いや、何も知りませんねえ……………」

「……………」

「あの……………変なこと言っちゃいましたかねえ。。。？」

「……………ああ！！！！なんでもないぞそうでもないぞ？いやあ、この世に『天空の使者』の伝説を知らぬものなどおらぬと思っておったのだが……………」

いますよ、あなたの目の前に・・・

「とりあえず、その伝説とやらを説明してくれませんか?」

「私が説明いたしましょう!!!」

ドドーン!と、あまり無い胸を張って姫様が出てきた。もしや、キヤラ狙ってるな?

「お願いします」

「ふふふ・・・ええーつとですね、伝説にはこうありました。

『この世に魔が現れ、魔がはびこり、魔に汚染され空が赤紫に染まるとき、一人の者が世に降り、世から全ての魔を排除する。その者は空と同じ色の瞳を持っていたという。人はその者を天空の使者と呼んだ』

「……………ですね。」

「マジですか・・・？」

「本気と書いてマジです。」

「魔ってなんですか？」

「魔物、魔獣、魔族のことですね。」

「そうですか・・・でも『天空の使者』はオレじゃないと思う・・・」

「いいえ、あなたしかありません。」

「でも・・・紅の眼の人がいるんだから、赤紫くらいいるんじゃない？そこらへんに」

「いえ、どんな人間の眼にも赤紫の色素は入っていません。だから、あなたは絶対に『天空の使者』なんです！」

普通は赤い眼なんて無いよ・・・！

「ハア．．．で？オレに何をしろと？」

「あの．．．お願いです、魔帝を斃してください．．．このままだと、人間が滅んでしまう．．．」

「（魔帝つてのは魔王みたいなもんかな？）なぜ人間が滅んでしま
うんですか？魔帝と戦うことならそこにいる兵隊さんたちにもでき
るんじゃないですか？」

ブンブンブンブン！！！！

兵隊さんたちが顔を真っ青にしながら首をすごい勢いで横に振って
る。

さっきまでの敵つい顔はどこへいった！？

「あの．．．魔帝は単体で国一つを落としてしまっただけで魔力が強く、
とても兵士達では相手になりません．．．」

「国一つ単体でって．．．どんだけだよ．．．待ってください、オ
レにも魔力なんてありませんよ？」

「．．．なら計ってみます？」

「……………え？」

「出でよ、『魔力計測器』……………!!!!」

どおおおおおんん!!!!!!

「うおおおおお!!?」

空から一人くらい入れるロッカーみたいなのが落ちてきた。

「さあ、入ってください。」

「ええっ!?!?」

オレ、閉所恐怖症なんですけど……………

「さあ、跪きなさい!」

「どこの黄色い王女ですか?!?!?」

幸いオレ以外は無傷のようだ。

「.....」

ありゃ、また皆呆然としてる。なぜ？

第二章 やってやるよ(前書き)

さあ、またまた更新の遅れたOld Plainですよ。

ごっ！ごめんなさい！次は頑張るから、頑張るからそのスラッシュ
アックスはしまってくださいええええ！！

第二章 やってやるよ

「なんと……………」

「あのー、オレなんかヤバイことしちゃいました?」

まさかこれ相当高いんじゃないか……

「魔力が計測できないなんて……!だって私でも爆発しませんでしたよ!?!」

「普通は爆発しないのか?」

「……………しませんっ!!!!!!!!!!!!!!」

このとき、玉座の間に居るオレ以外の人間すべてが一つになった。

「じゃあ何で爆発なんか……」

「うーん、計測器が壊れていたか、又は魔力が大きすぎたか……」

「後者は絶対に！！ありえないと思います。」

だって、オレはただの一般ピーポーだぜ？

「ありえると思いますよ？」

「なんでですか!？」

「だってあなたは『天空の使者』だからです。」

いや、オレはただの違う世界から来た赤紫色の眼の高校生ですよ．．

えっ？何々．．．オレはもうすでに普通じゃない．．．？

そもそも赤紫の眼が付いてる時点でもう普通じゃない？

じゃ、オレは生まれたときからアブノーマルだったのか．．．

何か悲しくなってきた．．．

それと同時にこんなに異常なら、魔力とやらがありえないくらい多くても不思議じゃない、と思ってしまうた。

「そうですね．．．」

「そうですねですよ。あつ、そうですね、この国で最も魔力があるのは母上で、たしか、一流魔導師80人分．．．でしたっけ、母上？」

「あー、そんなところだったかしらね？」

．．．．．すんません、スケールがわかりません．．．

そんな思いが伝わったのか、姫様が親切にも魔力のスケールを教えてくださいました。

10 - 500 平民

501 - 2000 一般魔術師

2001 - 5000 二流魔術師

5001 - 7000 一流魔術師

7001 - 10000 一般魔導師

10001 - 30000 一流魔導師

30001 - 50000 一流魔導師

らしい。

ということとは王女様の魔力はだいたい40000000くらい・・・
よんひゃくまん・・・

それでも測定器は爆発しなかったのに爆発したオレの魔力っていつ
たい・・・

「わかりましたか？あなたには力があるんですよ、そこにいる兵士
たちとは違って。」

グサア！！

うわぁ・・・さらりとひとつどい事いうなあ姫様・・・
見てよ、兵士たち胸を押さえてもがき苦しんでるよ？

「これなら国一つ落とせますかね？」

魔帝みたいに。

「落とせますねえ、普通に。」

そうか・・・

「あの、お願いします。私たちだけでは到底魔帝には敵わないんです・・・今は魔物から国を守るのが精一杯で・・・だから、その力を・・・貸してもらえないでしょうか・・・出来る範囲のことなら何でもします。望まれるならこの身体だって・・・だから・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

オレは彼女の眼をじっと見る。

その瞳には、一切の迷いがなかった。

・・・彼女は本当にこの国を大事に思っているんだな。でなければあんなに意思の強い眼はありえない。

恐らくオレが望んだら本当に身体を差し出してしまうだろう。もちろん、望むつもりはないが。

怖く、ないんだろうな。国のために、自分の全てを差し出すことが
・

オレも、彼女のようになれるのかな？

何かをこんなに思えるのかな？

彼女と一緒に居れば、なれるかもしれない。

それに、なんだか知らんがオレにはちょっと力があるみたいだ。

なら、言うことは一つだけしかない。

「おう、やってやるぞ。」

なんとなくだが、断っても元の世界には戻れなさそうだ。

「えっ・・・ほっ、本当ですか！！？」

帰れなくても、いいかもしれない。あつちはあつちで嫌な思いをしなきゃいけないんだ。

「本当だけど、姫様も付いて来てくれないか？」

「えっ？もっ、もちろんですっ！！」

幼馴染2人はちょっと心配だが、こっちは国丸タワーがかかっているんだ。すまねえ、そっちはそっちで頑張ってくれ。

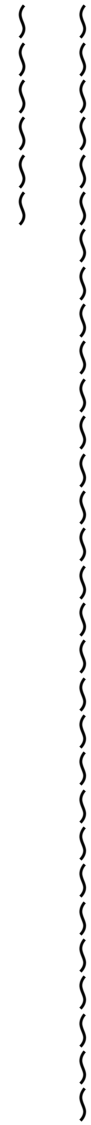
「よかった。．．．ちょっと疲れたわ．．．少し休んでもいいですか？」

「はっ、ハイ！！お部屋へご案内します！！！」

「お願いします」

この際だ。世界を救う勇者にでも、天空の使者にでも、な^よってやる

世界が今、動き始めた。



第二章 やってやるよ(後書き)

ハア・・・ハア・・・ハア・・・疲れた・・・

ちよつと無理があつたし、それよりもなんだよこの駄文・・・

間違いなどがありましたら、ご指摘お願いします。

第三章 姫様は方向音痴？（前書き）

ついに学校が始まってしまった・・・
こっからまた時間がなくなる・・・
ペースはかなりダウンすると思います。

第三章 姫様は方向音痴？

オレは今、用意してもらった客室に向かっているのだが・・・

「あの・・・まだ着かないんですか？」

実は、玉座の間を出てからもう10分ほど歩き続けているのだ・・・

「えっと、ここを真っ直ぐ行って、次を右、その次を左に曲がり、階段を上りまた直進、そして右に曲がり・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

姫様は、このデカイ城を全て把握しているのか？大丈夫だろうか？

数分後・・・・・・・・

「あ、あれ？おかしいな、この部屋だったと思うんですけど・・・」

「・・・」

やはり把握しきれていなかった様だ。
なので、道に迷っております。

「自分の家で迷子？」

「うっ！！！す、すみません・・・」

「とりあえず・・・」
「」はどこですか？

「えーっと・・・ここは書斎ですね。多分・・・」

「自信なさ気に言わないでくださいよ・・・まあでも、本がいつぱい置いてあるから、間違いないと思うけど・・・」

なんか、古そうな本がびっしりと棚にしまっている。因みに埃がやばいくらい充満している。

「．．．次、行きましようか？」

「そうですね．．．次は間違えません！！！」

数時間後．．．．．

あれからオレ達は城を彷徨い続けた。次は間違えないと言った姫様であつたが、何度も何度も間違えた。最後は近くにいた兵士さんに連れて行ってもらつた。客室は玉座の間から少ししか離れていなかった。どうやら最初に分かれ道から間違っていたらしい。

「失礼ですが．．．姫様つて．．．方向音痴？」

「うっ！！！！す、すみません、私地理は苦手で．．．」

「そうですか（こっちにも地理つてあるんだ．．．）．．．」

「ま、まあ着いたからいいじゃないですか！ささっ、ここが使者様のお部屋ですよ！？」

どうしよう……

「とりあえず、すいませんでしたあああ……！」

ボタン……！！

「……………」

「これで、ひとまず大丈夫なはず……」

なんで、こっちの世界に来てまだ一日も経っていないのに、あんなのを見にやならんのだ。

「……………部屋どこ？」

「このお向かいの筈……であって欲しいです……ホントに……
もう、お願い……」

ああ、姫様の自信がどんどん消えていくのが見える……最後に
かお願いになってるし……

ここですっと立ち止まっているのもあれなので、勇気を出して開けてみることにした。

「……………」

そおおおお……

カチヤッ

ギギギギギギギ

そしてそこで見えたものは……!?!? (まだやるんかい)

ただの綺麗なお部屋でした。

「よっ……よかったああ、もう間違っていないよ、間違っていないよ
お!!--うっ……うっ……ホントに!!--すみませんでしたああ
……うっうっうっ」

姫様は床に膝を付き、泣き始めてしまった。

「おいおい……………」

うーん、泣き止ませる方法ってなんかないかな？

あつ、そういえば孤児院にいたがきんちよ達は心臓の鼓動を聞かせたら泣きやんだな。試してみよう。

オレは姫様の前に跪き、彼女の顔を俺の胸に抱き寄せた。

「ちょっと我慢してくださいね？」

「えっ？ちよっ」

そしてギョツとする。

ギョツ

「……………!!??!!?……………?????!?!?!???!?!!???
!!??!!??!!??」

しばじくじつとしていたら、泣き止んだらしい、声がしなくなった。

そこで姫様を解放し、様子を見た。だが・・・

「うにゅうううう・・・」
「プシュ〜」

茹蛸のようになっていた。

そして、

パタン

倒れてしまった・・・

「あ、あれ？姫様！？」

その後、オレは急いで医者を呼び、診断結果はただの熱だそうだが、しかし、高熱だと言っていた。安静にしていれば直に熱は下がるらしい。

こうして、オレは記念すべき最初の日を、姫様の看病という形で終

その日、ある国が、突然闇に飲まれた。

第三章 姫様は方向音痴？（後書き）

学校が始まり、もう自由の時間が無くなってしまいました・・・

少しペースは落ちますが、頑張りたいと思います。

感想、評価、等等、よろしくお願いします。

第四章 さあ、アクシデントとんでも鑑定だ！！そしてどこの国での出来事

まーた更新の遅れたOld Plainです。

ほんとにすいませんでした・・・

一週間全て試合と練習で埋まって、投稿できませんでした。

第四章 さあ、アクシデントとんでも鑑定だ！―そしてどこかの国での出来事

姫様が倒れたその翌日。

「……………ん…ふわああああ…あれ？どこどこ？」

オレは半眼を開きながら、辺りを見回した。

そこは、今までオレが使っていた孤児院の部屋とはまったく違い、大きな鏡があり、真っ白で、広くて、絨毯の敷かれた部屋だった。しかし、まだ覚醒していないのか、白い霧がかかったように見えにくくなっていた。

「?????……………あ、そういえば、オレあの穴から落ちたんだっけ…………？」

でもここどこだったけ？

オレは朝が非常に弱く、起きてから5時間くらい経たないと覚醒できないのだ。

なので、今のオレは頭がボーっとして、昨日の出来事を思い出せな
いままだった。

そう、この目の前のベッドですやすや寝てる美少女と、自分の手のひらに感じるこのとっても柔らかくてあったかいものも思い出せず
.....ん？

今、気が付いた。

なんなんだ、この柔らかな物体は？

この、俺の手にジャストフィットした、揉むと気持ちいいものは？

自然と指が動く。

もみもみもみもみ.....

不思議だなー、なんなんだろうなー、これー。

「ん.....ん」

すると、目の前の美少女が小さな声を上げた。

あれ？

なんか、俺の腕、あの美少女の所に伸びてるんだけど・・・？

そして、その腕は、恋人や同姓でなければ絶対に触ってはいけ
ない場所へと伸びていつていた。

え？わからない？胸だよ胸・・・・・・・・・・ゑ？

「はっ！！？」

オレは一気に覚醒した。

視界を漂っていたしろい霧は払われ、目の前の光景を鮮明に、俺の目に映し出した。

どうやら看病しながら寝てしまったらしい。ベッドの横でひざを突き、ベッドにもたれかかって寝ていた。これだけなら全然いいんだ。

問題は、このオレの腕。あろうことか、姫様の胸へ一直線に伸びており、その胸をイーグルクラブ、鷲掴みしていたのだ。

だったらすぐに離せばいいじゃないか！？だって？やってみてくださいよ。

だって姫様うつ伏せで寝てるんだよ？どういふことかわかりますか？

様は、オレの手は、姫様の胸と、ベッドで挟まってしまっているんだよ!!!

このままじゃあ抜けない。それに、抜きたくないという感情が心の中で渦巻いている。

さっきも言ったように、オレの手にジャストフィットなんだ。そしてこの柔らかさだ。理想的な大きさ・・・大きすぎずに、小さすぎず・・・こといったところか？

それに姫様は薄いバスローブみたいなのを身に纏ってるだけ。ブラなんかない。その暖かさと柔らかさがじかに手のひらへと伝わってくる!!!

だけど、そうも言ってもらえない。こんな状態で姫様が起きたらどうなる？大変なことになるぞ!？

名残惜しいが、そろそろお別れだ。

オレは、そつと、腕を抜こうとした。しかし・・・

「ん・・・うあ・・・」

「っ!!!??!!??!!?」

おっ・・・起きた・・・？

「・・・すうー、」

ほっ・・・

うーん、わずかな振動で起きてしまいそうになる・・・どっする・・・？

「うーん・・・」

モゾモゾ

「（いまだっ！！）」

姫様がモゾモゾと動き始めたぞ！！？今のうちにこの腕を抜く！！

そして、挟まれていた俺の手に、わずかな隙間が出来た。

スッ

「はぁ、はぁ、危なかった・・・」

「うにゅうう、あ、おはよーいいますうー」

姫様が起きた!!

「はっ、はいおはよーいいますお姫サマー!..」

姫様はベッドから抜け出し、窓のほうへ向かった。

「ん．．．にゅうううう!!..!!っはあ!うーん、今日もいい天気
ですねえ」

「ソ、ソーデスネー」

適当に相打ちをしといた。どうやらバレていないようだ。
胸を揉んだことは永劫秘密にしておこう．．．

.....

場所は変わりここはまた玉座の間．．．だがオレと姫様以外は誰も
いない。

「何で誰もいないんだ？」

「今日は隣国との友好関係を築くためのパーティがあるそうですね？」

「ふーん、そうなんだ。あれ？姫様は行かなくていいの？」

「私、ああいう類のものが余り好きじゃあないんですよ。暇さえあれば寄ってたかって踊ってくれたの、結婚してくれ、だの・・・いやなんですよ。」

WOW、姫様 MOTEMOTE？まあ、こんな美少女じゃ仕方ないよな。

「そうなんだ。で？何でまたココに？」

「はい、今日は使者様の特殊属性と適応魔法属性を確かめるためです。」

「?????????なんですかそれ？」

特殊属性

人が生まれながらに持つ魔法属性。その人にしか使えないという属性が多い。例えば、有名な特殊属性に「聖」と「死」というものがあるが、これは王族の限られた者と、魔帝の一味にしか使えないと

いう。その他にも、音、反射、鉄、速度など、いろいろある。それぞれ強化版が存在しており、音なら爆音、反射なら鉄壁、鉄なら金速度なら神速、などになる。聖と死はそれぞれ光と闇の強化版だが、光と闇は稀に一般人が使うこともある。だがそういう人の場合は、王国でかなりの上位についている人物になることが多い。これは一人に一つずつしか持てず、複数はもてない。だが、適応魔法属性よりも高い威力が出せる。

適応魔法属性

その人が使える魔法の属性。これは特殊属性とは違い、いくつでも持てるが、三つ以上持つ者は珍しい。まず最初に四大元素属性というのがあり、火、水、風、土がある。それから融合属性。火と水を合わせて霧、水と風で氷、風と土で砂、水と土で木、火と土で溶岩、火と風で雷、というように、ふたつの属性を合わせて作る属性もある。これは難易度が高く、二つ以上属性があれば誰でも出来るが、成功した人は余りいない。そして最後は光と闇。使えるものはかなり少ない。

「ありがとうございました。」

「はいはい では、調べますよー?」

「どござって?」

「そうですね、じゃあ両手で皿を作ってください。」

「はい」

「次は、眼を瞑って皿の真ん中に球体がでてくるのをイメージしてください」

イメージ・・・すると、ちょっと大きめな、空色の球体が浮かび上がってきた。そしてそれは、どんどん色を変えていった。

「・・・はい」

「何色ですか?」

「えーっとですね、空色、赤、青、緑、茶色、白、黒、紫、黄色、赤茶色、灰色、深緑、透明・・・ですね」

「……………ぬ？」

「いや、ぬ？って言われても……………」

「それは……………本当ですか？」

「いやあ、嘘をついても仕方がないと思う……………よ!？」

眼を開けると、そこには大きな紅い眼をキラキラと輝かせながらオレを見上げてる姫様がいた。

「ス……………スゴイです!!流石は使者様!!!!!!」

「えっ、なに?そんなにすごいのか?」

そんな、なんでこんな眼で見られているのかわからないオレであった……………

- - -
ここはある国のある場所 . . .

ダダダダダダダダ

バタン!!!

「たっ、隊長、大変です!!!!!!」

「どうした騒々しい。」

「そっ、それが、私がネオブルグの偵察をしていたら、ネオブルグの国が、急に闇に飲まれたと思ったら . . . 次の瞬間には」

更地になっていました!!!!!!」

「はあ?なにを馬鹿なことを . . .」

「隊長!!!ネオブルグに侵入していたボルゾー中佐の魔力通信が途

切れました!!」

「なんだって!?!ぬう、こいつの言うことが正しいなら、何があつたというんだ?」

- - - - -

『もっと．．．もっとだ．．．もっと、多くの血を、多くの生贄を．．．』

その男は、赤い地面の上に立っていた。

そしてその背には、無残に「喰い」殺された人たちの山があつた．．．

第四章 さあ、アクシデントとんでも鑑定だ!!そしてどこかの国での出来事

さーで、前半に暴走してしまいました、Old Plainです!!
そしてお気に入り登録が1件入っているのを見て大喜びしたOld
Plainです!!

こんな駄作をお気に入り登録してくださって、ありがとうございます
す!!!

実はいま期末テストみたいなのをやってます、多分しばらく更新
できないと思います...

では、これにてごめん!!

第五章 どこにでもいるよね、自意識過剰な奴（前書き）

お久しぶりです、Old Plainです。

活動報告で報告したように、少々怪我をして更新できませんでした。

・

これからも頑張っていきたいので、あなた方が持っているスラッシュ
ユアックスとボウガンは私に向けてください・・・

え？なに？ゆるさんって？そ、そんな、まっ・・・・・・・・あべしっ！

！！

第五章 どこにでもいるよね、自意識過剰な奴

さて、とりあえずこの姫様をどうにかしなくては……

「姫様？」

「……………はっ！？はい、なんですか？」

「……………大丈夫ですか？さっきからポケーッとしてましたけど……」

さっきからというのは30分ほど前のこと。

オレが頭の中に浮かんだ球の色を述べた後から、ずーっとボーっとしたままだった。何を言っても無反応。ただただオレを見上げてた。

「ええ、大丈夫ですけど．．．それより、本当にそんなに色が浮か
び上がってきてましたか？」

「いや、だからこれで嘘ついたってなんにもならんでしょっ？」

「たしかにそうですけど．．．これが事実だったらすんごいこと
ですよ！？わかってるんですか！？」

姫様が突然、オレの服の襟を掴みながら、オレの頭をブンブンと
振り回し始めた。

くそっ、なんて力だ．．．！遠心力で首の骨がイっちゃまいそうだ！
！！

「だ、大丈夫ですか!？」

と心配そうにオレを見つめる姫様

「な、．．．．．なんとか、ハイ。」

と、心で、誰のせいだ!と叫んでいるオレ。

数分後．．．．．

「すみませんでした．．．．．」

待てよ・・・？まさかこれは・・・！！？

これは、作者がたまになるスーパー鬱モードではないか・・・！！

自分の欠点を全て吐き出し、そして周りまで巻き込むという究極の鬱・・・！！！！！！

くそっ、なんだかオレも鬱になってきた・・・しかし、ここで飲み込まれたら二時間はものすごい鬱になっちゃうんだ！！

64

どうにかして姫様を止めなくては！！！！

主人公のターン！！！！！！

1・戦う

2・逃げる

3・褒めちぎる

4・押し倒す

さあ、どれだ！！！！！！！？

．．．．．うおい！！！！！！

明らかに4おかしいだろ！？押し倒してどうなるってんだ！？

戦うっても、戦いかた知らんし．．．

逃げる．．．最も魅力的だが、このままでは国が魔帝に侵略される前に崩壊してしまう。

褒めちぎる．．．か．．．あの髪の毛、あの美少女っぷり、あの胸の柔らかさ．．．最高だが、方向音痴が出てしまった今、ほめても意味がない。

どっしする．．．どっししちゃうのよ．．．！！？

ボタンー！！

そのとき、オレの後ろのドアが勢い良く開け放たれた。

「????」おお、私の妻、アリア姫よ！！ここにおらたか！！！！！！

そこには、デブツとした、きらきらの服が似合わない金髪の男がいた。

「……………だれがあなたの妻ですって？」

あ、姫様ってアリアって名前なんだ、初めて知ったわ。

ってか妻？もう結婚してるのか！？

いや、アリア姫の反応からすると、相手が勝手にそう思っているだけのようだ。

「なんのようですか、ポルク侯爵？婚約の話なら先日断ったはずですが？」

ポルク…………ルーマニア語で豚か…………いい名前だ、こいつには

「おお、婚約の話ではない。今度は結婚の話を…………」

「いや、婚約を断られてんだから結婚できるわけないだろ!？」

「……はっ!? つつこんでしまった!？」

「ん? なんだい君は? 私とアリア姫の素敵な時間を邪魔する気かい? 君のようなダサイ格好をした輩にそんなことが許されるとでも? そもそも、こんな完全無欠で高貴な私からの求婚を断るなんてアリア姫も人がわ」黙って聞いていればなに言っただけだ。」「なに!？」

こいつ……潰してやろう……。こういうやつムカつくんだよ……

「ハハハ、おいおい、誰が完全無欠だつて? オレの視界にはそんな人物、写っちゃいないが? お前、鏡見たことあるか? あるよな? 自分の身体よく見てみるよ? 丸だぜ? ○だぜ? お前でドッジボールしてやるうか? 頭はうつすらとハゲかけてるくせに、気取ってパーマなんかかけてんじゃねえよ。お前のその服もなんだ? ククッ、オレを笑わせたいのか? せっかくお金をかけて買ったんだろうけど、よくみる、ボタンが今にもはじけ飛んでいきそうだぞ? オレのユニ○口の方がよっぽどセンスあるっつーの。」

「グッ……貴様……!!」

「ああ？文句あんのか？文句があんなら・・・脂垂れ流してねえで、ハッキリいったらどうだ！！！」

「ヒイツー！！」

「フン、ちつちえな。でかいのは態度とその肉だけかよ・・・おら、さっさとオレの視界から消える豚野郎」

「グツ・・・貴様名を名乗れえ！！いつか、パパに頼んで必ず潰してやる！！！」

顔を真っ赤にしながら怒り狂うポルク、もとい豚。

「ああ、いいさ。オレの名はなあ・・・」

天地 翔（あまじ しょう）。シヨウとでも覚えておけ、豚野郎。

L

第五章 どこにでもいるよね、自意識過剰な奴（後書き）

さあ、やっと名前が決まりました!!!

アリア姫ですが、これはウエールズ語で「銀」と言う意味のアリアンから取りました。

ポルクはこれからも出していきます。なにせ書きやすいもので・・・近くに何十人といえるんですよ、こんな奴が。

そしてショウのように潰してます。

ではでは、近いうちにまた、これにてごめん!!

第六章 ついにオレの能力がわかる!!? (前書き)

今回は遅れなかったぞ!?

まあ、内容が内容でレベルが低いから意味はないのだけど・・・

第六章 ついにオレの能力がわかる!!!?

「あ、使者様、シヨウというお名前だったんですね!? 初めて知りました!!!」

「姫様もアリアって名前だったんですか!? 知りませんでしたよ!!!」

あたりまえだ、前回名前出したばかりだからな。

「ん?なんか今とてつもない変態的な声が聞こえたような...」

誰が変態だ!!! 私はずただの変態&厨二の中三だ!!!!!!

「いや、もっと悪いだろ!?!」

「?シヨウ様?」

アリア姫が不思議そうな目でこっちを見る。どうやら姫様にはこの声が聞こえていないようだ。

「ん？ああ、なんでもないなんでもない！っつと、そういえば、どうしてあの時あんなに慌ててたんだ？」

「え？あ、あの時とは……」

右手を頬に当て、首をかしげるアリア姫。ダメだ……これだけで平常心ポイントがどんどん削られていくぞ！？

「ほら、襟を掴んで俺の首を『おい待てそれ以上言つな！』え？」

頭の中にまたあの変態的な声が流れてきた。

『お前、馬鹿か！？馬鹿なのか！！？』

「は？なんだと！？」

「シヨ、シヨウ様！？」

「あ、ごめんごめん、なんでもないです、はい」

ここからは全てシヨウの脳内での会話です

『で？誰が馬鹿だって？』

『いや、お前だろ』

『何で！？』

『お前さ、アリアにあのこと思い出させてごっするよっ』

『えっ、だって覚えてないんだから思い出させてあげようとしただけだろ？』

『ばっかやるおおおおおお！……！……！……！』

『だから何でだよっ！？』

『お前、あのオーラを止められるのか？』

『あっっ』

『思い出したら、またスーパー鬱モードになっちゃっただろ？そした

「ら今度は本当に国が滅びるぞ？」

『・・・・・・・・あつ、それもそうだ！』

『だろ？あそこで四つ選択肢があつたが、全て実行できなさそうだったから、仕方なく豚を出してやったんだ。しかし、二回目となる話は別だ。いるかどうかはわからないが、読者様たちは新しい展開を望んでるんだ。何回も豚を出せるか。それに私自身豚を登場させると、精神的に病んでしまいそうになる。』

『なんでや』

『私は自意識過剰な奴と貴族っぽい奴は大嫌いなんだ。そんな奴らを、どうして無理しながら何回も出していかなくてはならない？何回も出るかは言ったが、それは私のストレス発散のためだ。基本的に好きじゃないのだよ、豚みたいな奴は。』

『はあ・・・・・・・・で？どうすればいい？』

『とりあえず、お前の能力について聞いてみる。後は私が何とかする。』

『わかった。だけど、あんたはいつたい何者だ？どうしてテレパシ―みたいなことをしているんだ？』

『それは・・・・・・・・私が変態と厨二を司る神、Old Plainだからさ・・・・・・・・』

『そんなのが神やってて大丈夫なのか？』

『……………自信ない』

『だろうな……………とりあえず、やってみるから、後は宜しく頼むわ。』

『あいわかった。じゃな』

脳内会話、終了

「……………ふう」

「あの、どうかしましたか？」

「あ、いや、なんでもない。ところで、オレの特殊魔法属性と適応魔法属性はなんなんですか？」

そういえば、二話も前にその説明したのに、結局わからずじまいだったもんなあ……………

「そ、そのことなんですが……………」

「えっ？なんかまずかったの？」

「そうではないんです！ただ、あの、普通にありえなくて……」

ありえないってなんだよ？まさか、なんの属性も持っていないなかったとか！？おいおいマジかよ！？異世界に来て能力無しなんて死んでくださいって言うてるようなもんじゃん！？この小説を十話以内でおわらせたいのか！？

「……………どうありえないんですか？」
恐る恐る聞いてみた。

「えっとお……………」

全部です」

「……………はい？」

「えっと、だから、全部なんですよ・・・」

「それは、あの、全部使えないって事っすか？」

そうだったらこの物語はすぐに終わるな。

「いや、違います、全部使える・・・ということですよ」

.....

「えーっと、・・・マジで？」

「空色が何を表すかはわかりませんが、それ以外だったら全属性です。ね。」

わーお、なにこれ最強、チートって奴？

「そうですか・・・で、なんでそんなに凄いんですか？ただ属性が多いただけですよね？」

「そう言われればそうなんですが、属性の数というのはその人の魔力の量に比例するんですが、普通は多くても三つなんですよ。お母様も霧と木は使えませんし……」

えっ？国一番の魔力の持ち主でも？じゃあこれってけっこう凄いんじゃない……

「すごいですか？」

「すごいですよー!？」

そうか……

「あ、でも、マナがなければうまくコントロールできないので、どうでしょう、測ってみます？」

「そうですね」

ここまでチートみたいになってるから、きっとマナも高いはずだが……

結果：悲惨

どう悲惨かって？そりゃ、マナが一般人程度しかないからだよ．．．

アリア姫曰く、これだと魔力をかなり無駄遣いしてしまうらしい。

おい、変態と厨二の神！！聞いてないぞこんなの！！！！！！

『だから、タグに「主人公『半分』最強」って書いてあんじゃないん』

「クソオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！」

第六章 ついにオレの能力がわかる!!?(後書き)

はい、シヨウのマナの量も悲惨でしたが、話の内容も凄惨で悲惨でしたね・・・

ほんとすいません、文才なくて・・・

でもこれで旅に出かけさせる準備はできた!!!!!!!!!!!!!!

第七章 謎の幼女（前書き）

すみません、めっちゃ短いです……

第七章 謎の幼女

白と無と幼

恐らくこの言葉が、今の状況を表すのに最も適しているであろう。

アリア姫からの小説の主人公に対して結構ダメージの大きい宣告を受けてから、オレは部屋で不貞寝していた。大体、アリア姫も作者も散々オレを期待させといて、最後の最後で裏切るとかどういことですか。全魔法属性が使えたとしても、コントロールできないじゃ暴発して自滅しか無いじゃん。まあ、何も出来ないよりは全然マシだけど・・・小説の主人公としては、やっぱり最強でいたいんだよね・・・因みにアリア姫、マナはかなりあるらしい。

まあそんな感じでうだうだ言いながら眠りに付いたわけだ。今度はアリア姫もいないし、オレ以外誰もいないはず、そう強く信じていた。

そう、朝、腹の上の違和感に気がつくまでは・・・

「……………ん、……ふうああああっ、ふう！ああ、良く寝たわぁ……………」

オレはすつきりさっぱり起きていた。前回とは違う。あの時はいろいろと疲れてたんだ。

ベッドの上で、首だけ動かし、近くにある窓をのぞく。ちょっと外がどうなっているか気になったんだ。でも、そこから見たのは太陽とちょっと赤っぽい空だけ。城の近くにあるであろう城下町は見えなかった。……………そういえば城下町なんてあったか？もうちょっと近くで見よう……………そしてベッドに手を付き、身体を持ち上げ……………ようとした。

「……………？あれ？なんか重くなった？オレ？」

なぜだか知らないが、身体が持ち上がらない。なんだか、一人一人分体が重くなったような……………ん？人一人？

なーんだか嫌な予感がして、毛布越しに自分の腹部に目をやる。予想したとおり、そこにはそれなりの大きさのふくらみが出来ていた。決してオレの腹ではない。

どうしていままで気がつかなかったんだ？あの、耳に鉛筆挟んでいて、しばらくしたら鉛筆がどこにいったか忘れる、見たいな感じか？長い間腹の上に何かのつてるから、気がつかなかったのかもしれない。

出来ればあまり覗きたくは無い。しかし、この問題解決とストーリー進行のためにも、オレは覗かねばならぬ。

バツと、布団をめくった。そして重みの正体がついに目の前に現れた！！

なんと、寝巻きを着た幼い女の子「幼女」でした。

見た感じ、7歳位か？髪の毛は金髪のぐるぐる、二箇所ドリルにな

ついているところがある。長さは首の根元ほどまで。まだ幼くとも成長すれば大層な美少女になるであろう寝顔をしている。それがオレの腹の上で丸くなっている。．．．恋○無双の○紹本初さんも、幼いときはこんな感じだったのかなあ．．．

まあ、とにかくだ。やばいよ、かわいいよ．．．オレは別にそんな年々少しずつだが増えつつある特殊な性癖の持ち主ではないが、これはかわいいぞ。多分これはそんな性癖の持ち主達にとっては夢のような状況なのだろう。

「．．．．．ん？ふああああ．．．」

適当にそんなことを思っていたが、どうやら目が覚めたらしい。

「．．．ふう、良く寝たのお．．．ん？なんじゃ？変な顔しおって？」

いや、いきなり幼女が起きてお年寄りの言葉使ったらびっくりするでしょ？

「なっ！？誰がお年寄りじゃ！わらわはまだ身体を初期化してからまだ七年しかたつとらんのだぞ！？」

は？初期化とは？なにそれサイボーグ？ってか今心読んだ？

「ん？さいぼーぐとはなんじゃ？というより、心が読めるのは当たり前であるっ？神なのだから。」

「……………はい？神？」

「そう、神。」

「……………ねえ、どこからきたの？お家はどこ？お兄ちゃんが連れて行ってあげるよ？」

「別にわらわは迷子の少女ではない！それに信じてないじゃろ！？」

わらわは神なの！！全世界の！！！」

「……………」

ダメだ、この子を病院へ連れて行かなければ……この年で厨二病に侵されているなんて……

「あー、守衛さーん？ここに頭のかわいそうな女の子がー」「うっわあああああまでまでまで！！！！うーーん、せいっ！！！！」「つて！？のわぁー！！！」

守衛を呼ぼうとしたオレの目の前に、突然白い穴が現れ、幼女は、幼女であるかどうか疑いたくなるような腕力でオレをその穴へと放り込んだ。……なんかこの小説、穴が多すぎね？

ドガツ、と音を立ててオレは穴の底に落ちた。

そこに広がっていたのは、……何も無かった。ただの『白』と『幼』。

これが白と無と幼の正体だった・・・

第七章 謎の幼女（後書き）

やっほーいーい！！……！！やっただやっただ、お気に入り件数が1件増えてるひやっほーいーい！！……！！何？レベルが低いですと？あたりまえですよ、私、まだレベル1にも達していませんから。

とりあえず、遅れて申し訳ありませんでした。

第八章 唾兎女（前書き）

グダグダです、許してください・・・

第八章 唾兎女

「こ、ここはどこだ??」

「亜空間」

幼女がそう答える。神様と自称しているが、見た目が見た目なのでまったく説得力が無い。これがひげを長く伸ばした爺さんや、綺麗な女の人ならまだいいが、ただのかわいい幼女だ。厨二Virusに侵されているだけかもしれない。そう、作者のように。

『厨二だけじゃないぞ?変態Virusにもとっくの当に侵されまくっているぞ?』

OldPlainが脳内念話してきやがった。

「うるせー作者!?!どついつことか説明しろ!?!」

なぜかこいつの声を聞くといらいらする。やはり作者だからである
う。

『いやいや、それはそこにいらっしやる世界神せかいしんユイ様が話してくれ
るよ。』

「えっ？世界神ユイ様？誰？？」

認めたくない。こんな幼女が神なんて・・・ありえないはずだ、あ
りえない・・・

「ん？呼んだかのお？？」

反応しやがった・・・

「お？お主、誰かと念話しておるな？誰じゃ？？」

「ええと、変態と厨二の神？」

「おお！Old Plainか！久しぶりじゃのお！！元気か？」

『こ、これはユイ様！！もちろんでございます、ハイ！ユイ様も、いつまで経ってもお美しゅうございます。』

「これこれ、お世辞はいらんよ・・・お？Old Plainこそあなたに祈りを捧げている者がいるぞ？見に行つてやれ？」

『あ、ホントですね。では、またお会いしましょう！！じゃな、シヨウ！！』

脳内会話、終了。

「祈りつて・・・いつたいどんな・・・」

「みたいかの？」

「見たい。」

「そうか。では、わらわの手を握りながら目を瞑れ。過去の出来事を見せてやる。」

そういつて小さな手を差し出してくるユイ。とりあえず握ってやる。

「.....」

V i s i o n
S t a r t

ここは、ライトガルド聖国城下町。今現在シヨウウがいる城の下にある街。ここでは、多くの人々がのびのびのんびりすごしている。しかし、ここはシヨウウが落ちてくる十数年前である。

そしてここに、一人の画家がいた。彼は特に才能があるわけではなく、少々金に困っていた。

「ああ、神様、私に、私になにか、なにか画期的なアイデアを……
どうか……！」

彼は天に祈りを捧げていた。そして、Old Plainはそれを聞いていた。

『画期的なアイデアねえ……お、そうだ、オリジナルじゃないけど、あれにしよう』

そういつて、彼はそのイメージを画家の頭に送り込んだ。

「んっ!? なっ、なんだ．．．あ、頭がツ!! あああ!!!!」

彼の脳に、雷が落ちたような痛みが突き抜ける。画家は頭を抱え呻きだした。

しかし、しばらくすると、頭痛も治まり始めた。

「ハア、ハア、ハア．．．なんだったんだ、いったい．．．ん？」

すると、彼の頭の中に、一枚の絵が浮かび上がってきた。

その絵には、複数の少女達が、それぞれ楽器を持ち、歌っている図である。そう、けい○んである。この時代、絵というものは全て写実的、つまり本物に似せて描くものが主流だ。なのでこの世界にアニメや、マンガは存在しない。なのでこの画家はけ○おんを知らない。

「なんだろう、この楽器は．．．しかも、この少女達、なにか、普通の絵よりもかなり魅力的だ．．．なんかこう、燃える、という

か、なんと言うか・・・ハア、ハア・・・」

もちろん、まだこの世界に『萌え』という言葉は存在しない。そう、
『まだ』・・・なのだ。

「っ！！！！！！そ、そうか！！そういうことだったのか！！！！」

なにかひらめいたのか、近くにあった紙と鉛筆を取り出して、一心
不乱に何かを描きだした。

「ハア、ハア、ハア・・・で、出来たぞッ！！」

その絵には、やはり楽器を持った少女達の姿が。しかし、イメージ
と違うのは、楽器がこの世界に存在しているものに変わっており、
服装も少し変わった程度。しかし、この画家はこの絵に大いなる期
待を寄せていた。

「これはきつと、神様からの贈り物だ・・・！早速展覧会に出すぞ
！！！！」

そういつて、彼は家を飛び出した・・・

数日後、その絵は展覧会にて多大なる評価を得、画界の新たな光と評価され、全世界に広まった。いままでとはまったく違う画法により描かれた少女達は、たちまち人々を虜にしていった。彼は、瞳を少々大きめに描くこの画法を、アニメ啞児女と呼んだ。そしてそれは、画界に大いなる影響を与え、啞児女を真似て違う絵を描くものたちが急増し、人々の癒しとなった。あの画家は啞児女の父、神と呼ばれるようになった。

因みに、あの絵を評価した人のコメントはこうだ。

「なんだ、これは・・・この少女達を見ると、まるで体が燃えてしまいそうになる・・・」

このコメントにより、『燃える』『萌える』という言葉が生まれた・・・

V i s i o n , E n d

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ほい、終わりじゃよっ」

心の底で思ったことがある。

神様、GJ・・・

第八章 唾兎女（後書き）

すみません、また進みませんでした・・・でも次回は必ず進めて見
せます、見捨てないでください・・・

第九章 神様と翔の過去（前書き）

前半コメディチック、後半それなりにシリアスです。

初挑戦なんで上手くできんかった・・・

第九章 神様と翔の過去

前回、神様GJと言ったが、その発言に質問があったので、この場で説明するでしょう。

そう、オレはオタクなのだ。ミ〇ミ〇菌にも当の昔に感染されてるし、アニメも大好きだ。主に部屋に引きこもって生活していたので、自然にオタクになってしまった。だけどオレは後悔していない。なぜなら、オタク達はある意味日本の文化の一つなのだから!!!!少しづつではあるが、海外にもオタクは広がりつつある。なにせ、作者も外国人のオタクを見たことがあるくらいなのだから.....

と、そんなことはどうでもいい。読者様達も（いるかどうかは不明だが）ストーリーを早く進めろと思っっているだろうから。

Visi onの後、オレはやむなくユイを神様と認めた。認めざるを得なかった。どうしても信じようとしないうれに對し、雷やら炎やら投げつけたり、オレと幼馴染のあいつしか知らないであろう、コンピューターに保存してある画像を映し出してくるし.....どんな画像かは聞かないでくれ.....そんなこんなで、無理やり認めさせられたのだが.....

「違う！！もっと魔力を圧縮するような感じで！！」

「無理だつてこんなの！！オレ初心者だぞ！？それでも精一杯だあ！！！！」

「ふん、才能ないのお。それでも天空の使者か？」

「うっさいわ！魔力だけ馬鹿みたいにあつて、マナが平民並つてどついうこつちゃ！ここは普通チートとか最強とかだろうが！！」

「知らんわそんなこと。さっさと集中せい。」

「ムッキイイイイイ！！！！ああ、イライラするづづうう！！こんな状態で集中なんて出来るかつてーの！！」

いきなりこの会話を聞いたら訳がわからないだろう。とりあえずこ

こは説明だ。

まず、なぜこんなことをしているのか。それはユイの一言から始まった。

『あ、そうそう、お主をこっちに落としたのはわらわだから』

『・・・・・・・・・・・・・・・・は？』

『だから、お主を落としたのは』

『わかってる、わかってるから・・・・・・・・って！お前がやったのかよー！？』

『せし』

『あっさり認めた!?!』

『だって、事実であろう?』

『そ、そうだけどさあ．．．まあ、いいや。あのさ、』

ここで、ちょっと気になったことを聞いてみたんだ。

『どうして、オレにこんなことをさせようとしてるんだ?あんだ達神様なら、魔帝でもなんでも簡単に解決できるだろう?さっきのように、雷とか炎とかぶっぱなしやあ、一発じゃないの?』

そう、なぜ、国を一人で壊滅できるほどの半分チートみたいな魔帝を倒すという役割を、わざわざ別世界の、しかも魔法も何も知らない一高校生に押し付けたということだ。例えオレが馬鹿みたいに魔力を持っていたとしても、必ず勝つとは限らない。それだったら、圧倒的な力を持つ神がやったほうが安全で安心できる。

『それはな．．．神は、人間界に直接手を加えてはいけなからじ

や．．．』

『なんだって？Old Plainもやってたじゃないか。』

『あれはあくまでも？間接的に。彼が直接絵を人間に渡したわけではなかるっ？』

『言われてみれば．．．でも、何故、直接的はダメなんだ？』

『考えてみよ。我ら神は人間を遙かに超える力を持つておる。そんな者が直接世界に手を加えようものなら、この世界は神の思い通りになってしまふ。極端に言えば、人類も全て滅亡させることも可能じゃ。』

『うっ．．．確かに．．．でも、それだったら、オレをこっちに落とすなんてめんどくさいことしないで、こっちの人に魔帝の倒し方も教えればいいじゃないか。』

『．．．？悪の根源？は、魔力でしか消滅できない。しかし、そんな魔力量を持つものなど、この世界には存在しなかった．．．』

『何？』

ユイの言う？悪の根源？に妙な違和感を感じたが、魔帝のコトだろ
うとあまり気にしなかった。

しかし、大量の魔力量といえば、アリア姫の母を思い浮かべる。

『かの者では無理じゃ。あれでは悪の根源を消す前に魔力枯渇で発
狂してしまう。』

『は、発狂って大袈裟な．．．』

『大袈裟なものか。魔力を放出するという行為にはかなりの精神力
を必要とするのじゃ。なぜかというと、魔力とは生まれたときから
体内に有るもの。いわば血のようなもんじゃ。それを、全身から大
量に、少しずつ放出していくのじゃ。痛みは伴わんが、痛覚の方が
よっぽどマシだと思えるような苦しみが襲う。わらわは魔力枯渇に
なったことはないからどんな苦しみかは解りかねないが、人の遺し
た書物によれば、それはもう死んだほうが余程良いと思えるそうじ
ゃ。』

『う．．．でも、オレにそんな精神力は無い．．．』

オレは今まで、犯罪がまったくないとは言いつれないが、それでもかなり少ない、安全で平和な世界で暮らしてきた。しかも、精神を鍛えられたといえば、何年か続いた陰湿ないじめだけ。でも、それだけだ。特に生死を彷徨ったことがあるわけでもなく、普通ならどちらか選べないような二択を迫られたわけでもない。

しかし、オレの思考はユイの怒鳴り声によって掻き消された。

『な．．．なにが“それだけ”かつ！？お主は、あれほどのいじめを、“それだけ”と言うのか！！？』

『お、おめ、また心を．．．！』

『そんなことはどうでもいい！わらわはお主を、ここからずっと見ておった。普通の人間なら、あんなことを毎日受け続けていたら、精神が崩壊してしまうか、復讐に取り憑かれ、殺人鬼にでもなってしまう。しかし、お主は一人の大切な人を守るためだけに、決して逃げはしなかったではないか！！』

『……………そう、だな……………』

少し、昔の話でもしよつか……………

いまから十数年前。

ある小学校の狭い廊下を、三人の少年と少女が一列に並びながら全速力で走っていた。

「た、たいへんだ、チコクだよ、チコク!」
一番右端の、茶髪の少年が走りながらそう言う。その言葉どおり、
彼らは授業に遅れているのだろう。

「だ、だいじょうぶ、だよ、タイちゃん!まだマにあうよ!」
真ん中の、黒髪を肩の辺りまで伸ばした少女が、彼の心の叫びに答

える。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

一番左端の、黒髪の少年は、もう息が切れ切れだ。今にも止まってしまいそうである。

その様子に、少女が気がつき、彼に声をかける。

「ハツ、ハツ、しょ、シヨウちゃん！がんばって、もうすぐだから
！！」

シヨウちゃん、と呼ばれた少年は、コクリ、とうなずき、顔を上げた。

少し天然のパーマがかかったような少々うねりのある前髪。その下に覗いていた瞳は……赤紫色だった。

彼の名は天地翔^{あまじ}。後に天空の使者となり異世界に飛ぶ少年の、幼き日の姿である。

この時、彼はまだ一年生になったばかり。というのは、この日は彼らの入学式だった。彼らの住む孤児院は少々小学校から離れているので、到着が大幅に遅れてしまったのだ。

学校。世界中の子供達が勉強や運動に励み、恋をしていき、一生の友を作ることが出来る場所。この小学校も例外ではなく、今年も多くの子供達が大きな期待を胸に入学した。翔も、その中の一人だった。彼にも、楽しい学校生活が待っているはずだった。

「ハアツ、ハアツ、！！つ、ついたよ！！」

翔たち三人はようやく教室の前にたどり着いた。教室は扉が閉まっており、上のほうに窓があったが、彼らの身長では覗くことは出来なかった。

この扉を開けば、楽しい学校生活が待っている。新しい友達が待っている。

しかし、この扉の裏で翔を待っていたのは、友達でも、楽しい学校生活でも、なかった。

「ごーごめんなさい！！チコクしちゃいました！！！」

翔の、悪夢の扉が、今開かれた。

第九章 神様と翔の過去（後書き）

はい、お見苦しい文章でほんとうすいません、こんどまた更新します
んでよろしくお願いします・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5692p/>

天空の使者

2011年4月3日12時38分発行